太宰府人物志

資料室だより ⑯

博物館運動の先がけ

「九州人の百年の夢」といわれた九州国立博物館。その夢の始まりは、明治6～8年（1873～75年）に、西高辻信厳ら、太宰府神社の神官と小松宥八ら地元の戸長たちによって開催された「太宰府博覧会」でした。

開催者が作成した「博覧会票告」には、「太宰府が菅原大神の久遊の地であり、かつては鎮西の一都会であった」ことが強調され、太宰府神社所蔵の宝物や県内の新古物品を収蔵展示して東京や京都に負けることなく、人々の知識を研き、文明の進歩に役立てたいという意味のことが書かれています。当時としては全国に先がけた画期的な取り組みでした。

20年後、この博覧会の思想は西高辻信厳・江藤正澄・吉嗣拝山によって「鎮西博物館」という具体的な形を持った施設として提唱されます。鎮西は九州のこと、「鎮西博物館」は「九州博物館」と同じ意味です。この博物館は明治26年10月2日付で内務省より許可され、天満宮心字池の西畔に建設すべく「鎮西博物館建設事務所」が設置され、建設費・展示品収集費の募金活動が開始されましたが、日清戦争の勃発によって凍結され、建設に至ることはありませんでした。

この博物館を提唱した西高辻信厳は、菅原氏の嫡流高辻式部大輔正三位以長の4男。安政2年（1855年）数え年わずか10歳で太宰府に下り、別当信全の跡継ぎになります。時は幕末・維新の激動期、神仏分離令によって天満宮からは仏教色が一掃され、太宰府神社と改称、社僧は還俗を命じられます。そんな変革期、宮司となった信厳は、天満宮の存続と太宰府の町の発展に心を砕きます。その一つが鎮西博物館建設運動でした。

江藤正澄は、秋月の出身で維新後神祇官出仕となり、太宰府神社などいくつかの神社の神官を歴任した後、福岡簀子町（中央区大手門）で古本・古美術の店を構えると共に、考古学の研究と普及に努めます。海の正倉院「宗像沖ノ島」の祭祀に初めて考古学的観点からメスを入れた人でもあります。正澄は鎮西博物館の展示品として多くの文化財を収集しましたが、その大部分は、現在伊勢の徴古館に収蔵されています。

吉嗣拝山については別項（平成元年6月15日号）に掲載しています。

公文書館構想調査研究委員会
委員　森　弘子